
ポケットモンスター ~とある人外達の奮闘記~

林田 吾唯子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター～とある人外達の奮闘記～

【NZコード】

N1941V

【作者名】

林田 吾唯子

【あらすじ】

ここはポケモンと人間が共存する世界
一見平和な社会にも存在する差別と偏見。
その対象はポケモンであり人間である異形の者達。
総称は、無い。

そんな異形に生まれついてしまった少年少女達の小さな冒険記。

プロローグ

ここは私達の世界と表裏一体な、いわば明るい日常の暗部。

私達は日常的にポケットモンスターという生き物と共に存して生きて
いるがその中にもポケモンであり人間でもある生き物がいる。公に
されたことがないため公式な総称はなく、様々な呼び方が存在する。
彼等の外見は私達人間ととして変わりはない。私達と同じものを食
べ、同じように寝て起きて、同じようにポケモンを使役する。では
何故総称が存在せず、公にすらなつておらず、暗部と称されている
のだろうか。それは彼等と私達の間にある一線。彼等はポケモンと
同じく進化し、ポケモンと同じくそれのタイプに見合った力を
使うことが出来るのである。そんな生物は無論、危険とされ、遠ざ
けられるのが世の常。だが彼等に非はあるのだろうか？
此度語るのはそんな公にならない生き物の物語。

プロローグ（後書き）

小学五年生の頃に書いていたポケモン漫画をノベライズしました。
流れ的にはシンオウ地方から南へと進んでいくつもりです。
因みに主人公の親事情は単にいないといふことの言い訳的な？

来訪者（前書き）

主人公紹介的なコレ
日常の転機的なソレ
ネーミングセンスがアレ

突然だが、私に親はない。

私達、異端の人生は母体の胎内で突然変異的に始まるからだ。おなかを痛めて帝王切開までしてこの世に送り出した子どもが私とあつては気の毒な感情がわかないわけでもない。

生んだ瞬間に医者が告げた言葉により私の母は疲労とショックでストレス性ショック死したのだ。

父はそんな私の出生を聞くやいなや父親になることを放棄して母の後を追つた。

私の出生に意味は在ったのだろうかと思いつと哀感と罪悪感で潰れそうになる。

だから私の家族は父のモンスター・ボールにいたこのポッチャマだけだった。幸い私のポケモン部分はポッチャマなので対話だって成立する。それがせめてもの救いだった。

そんな私も、今日で十歳の誕生日を迎える。かといって私の日常にたいした影響は存在しないのだが。

『ヒヨウ、今日でヒヨウは人間の十歳になるんだよね？一分の一成人だよね？』

「ちやま、それは違うよ。私は人じゃない。だから成人もないの」

『そなんなど…あ！ねえヒヨウ、今日はヘンにおうちのまわりのナエトル達がざわざわ。炎タイプのポケモンとか、滅多に来ないモノが来るときみたい。ボクもザワザワそわそわ！』

彼は私の気持ちを切り替えようとしてくれているのか。気を遣わせてしまってなんだか申し訳ない気分だ。だが彼の言っているナエトルの異変も氣になる。私達が住んでいるのは湖畔のツリーハウス。それこそ炎タイプや二inggaなどが来ることは滅多にない。あるとすれば両者とも迷っている場合のみだ。それにナエトル達は他のポケモン達が感知しづらい湖の異変、環境の変化を敏感に察知する。

信用するに越したことはないだろう。なんたって草タイプ、植物な
のだから。

来訪者（後書き）

主人公の容姿：水色の内巻きの髪（肩まで）。ポツチャマの首元的な襟の付いた膝丈ワンピース。裾、袖口は群青のふちどり。黄色の靴を脱がない。目の色 水色。肌がもの凄く白い。

まさかのバトル展開 WWW（前書き）

何故こうなつてしまつたかなんて私には分からない。
小学五年生の頃の私に聞かないと分からない。
だって現在中学生の私はその頃のカオスな漫画を読み返してノベラ
イズしてるだけだもの…

『ヒヨウ！見て！』

ポッチャママのちやまが言つが早いか私が様子を聞きに行こうとした
ナエトル達が一斉に森へ走り出す。

「ちやま、おいで」

私はちやまと共に茂みに身を潜め、戦闘態勢に入った。

「おい葉矢、こっちであつてんのか？オレここで戦うのは嫌だぞ」

「俺がいるよお。それに反応はちゃんとここ付近だよ。ルイちゃん
の発明品を疑つた事がない剛毅にしてはえらく弱気だね」

「だつてアレだろ？ポッチャママだろ？オレ炎だぜ？勝算なんて」

「俺の事馬鹿にしてるよね？俺の葉っぱカッターの命中率知つてる
よね？」

私達の目に入つたのは一人の少年。歳は私と変わらないだろう。だ
が私が一番驚いたのは…”彼等が私と同じ”であること。

『ヒヨウ、この人達』

「分かつてゐる。でも用心して、無害とは限らないから」

『うん…』

＜ガサツ＞

いけない！後ろにまだ残つていたミノムツチが私を見て動いてしま
つた！

「つーおい葉矢！」

「うん、確かこっちの方で物音と同胞の反応が
はらから

二人が近づいてくる。もはや私に選択肢など残されていなかつた。

「ちやま、つつく！」

「うわあつ！」

私のちやまが葉矢と呼ばれた少年を私が茂みから私に投げ上げられ
た勢いを加算させてつつく。草タイプと思われる彼には有効なはず

だ。

「おまえついいきなり何をツ？！」

剛毅という少年が言い終える前に私は飛び上がり、空中にて彼にバルこうせんを放つ。田くらましには十分だったであろうか。

「くつ・・・」

予想以上のダメージを浴びることに成功したらしい。なら彼はこれで当分動けまい。

さて、葉矢の方はどう

「痛かつたじやないか。彼は強いボツチャマだね」

そう言って彼は戦闘不能になつたぢやまをそつと草むらに寝かせていた。

彼は、剛毅という名のヒコザル少年よりは強じよひだ。

「そうだね、自己紹介でもさせてもうつとするよ」

いや、しなくてももう名前は割れてるや？

まさかのバトル展開 WWW（後書き）

容姿説明

ナエトル的な少年：土色混じりの若葉色の髪。温和しそうな印象。
目の色 黄色。袖口とかが黒い土色のジャケット + 深緑の長ズボン。

ヒコザル的な少年：赤茶けた色の髪。荒っぽい感じ。目の色 朱。
茶色のリストバンド + 裸足 + 襟と袖が赤く、胴の部分が黄色いTシ
ヤツ + 茶色の長ズボン。

レッシ ベッド アウツ フロム テイス フォレスツ(前書き)

ちなみに前々話で名前だけ登場したルイちゃんはレタゴイアルの子だつたと思います。

サブ翻訳『この森から抜けだそつ』

レツ ベッド アウツ フロム デイス フォレスツ

「そうだね、とうあえず自己紹介でもさせてもいいとするよ」

「いや、しなくとももう名前は割れてるだ。

「俺は戊葉矢^{（いのや）}、分かつてるとは思うけれどナートルの異端者。そこでうめいてるヒコザル君が？^{（ほむらの）} 堕剛毅^{（トウカイ）}、君は？」

相手方も名乗っているので私もとりあえず、礼節というものをわきまえて。

「私は鋼屋氷華^{（はがねやヒヨウカ）}。見ての通り、私のポケモン部分はポッチャマ」

「鋼屋さん、だね？ 俺は面倒^{（めんとう）}」とが嫌いだから手つ取り早く済ませるよ。ん？ ああ、構えなくても大丈夫。信じてはもらえないかもしれないけれど俺たちは君の味方だよ

「保証は？」

「必要？」

でもどのみち戦つたとして私に勝ち田^{（勝利）}は無^{（ない）}いよつな気がする。何にせよ2対1では不利だ。

「用件は？」

「殊勝だね。うん、かいつまんでいわせてもらうよ。俺たちは君を迎えたんだ」

「…？」

ピリー・ヴィン アンド テイキン ア ステップ アベッシュド(前書き)

唐突で意味の分からぬ展開については小学生時代の私に文句を
どうぞ!

サブの翻訳 『信じて一歩、前に進むこと』

ピリーヴィン アンド テイキン ア ステップ アヘッド

そのまま私はいわれるがまま、彼等について行った。

戌の言ひようにもう一度と戻つてはこれないかもしないので私の家族として生きてきたポケモン達も連れて行くことにした。たつたの五、六年ぽつちしか住んでいない場所ではあつたが、それでも住処を離れるのは少し、淋しいような悲しいような何とも言えない思いだつた。

「うおひ、お前のギャラドス強そうじやん！」

「そうだね。それに標準よりも大きい」

彼等はボールにして私の兄妹の一人であるギャラドスのラドスに興味を持つたようだ。

「ラドスは小柄なコイキングだったからけっかも一緒によく遊んだ。気がついたら巨大化してたんだ」

誰かと人の言葉で話すのは久しぶりで、饒舌には話せなかつたけれど昔の感覚を思い返す感じが少し心地よい。道中の半分はたわいのない話でもしていようか。

「そのポッチャマはモンスター・ボールに入れないの？」

「彼が意地になつてゐる。どうしても入るつもりはないんだって」

『ヒョウだって女の子！男一人と歩くのは危ないの！ボクが男としてヒョウを守るの！』

・・・いや、戦闘能力的に無理だわい。

戦闘能力といえば、そうだ。

「戌…君？」

「何？」

「あなたわたしのちやまに勝つたでしょ？ ザウリヤツヒ？ 今ザウリヤツヒ
まが一番強い兄妹なのに」

私と私のポケモン達は兄妹なんだ。

小さい頃からずっと一緒に苦楽を共にしてきたんだ。
それを否定しようものなら何が何でも彼等から逃げるつもりで、あ
えてちやまを兄妹だと彼等の前で言つてみた。

「うん、正直言つてこのポッチャマ凄く強かつたよ。今まで見ただ
んなのよつ

否定、されていない…？

それとも気にもとめなかつたのかかは定かではないが、そんなの否
定しなければどうだつて良い。

私は、彼等を信じることにした。

ふと視線を下げるとなその言葉を聞いて胸を張るちやまがいて、胸に
沈殿していた重々しい何かが吹き飛んでしまつた。
さつきまでプライドをくじかれてその挽回をしようとは必死だったく
せに、彼の立ち直りの早さは一級品みたいだ。

「だからち、つづくとか、れいとうギームとかを必死に避けながら
この種を彼に投げ続けたんだ」

「何、それ

「やどりきのタネの改造版。養分を吸收する能力を削る代わりに根っこを強くはって相手の動きを鈍らせるんだよ」

「なるほど、確かにソレは得策。けやまの強さはあるすばしっこだから」

「そんでがんじがらめになつてきただといひを葉っぱカッターで一発。
俺の葉っぱカッターの命中率は血壓ノックできるほどだから急所に当たつ
K・Oかな」

「のつくあつとつて倒すつて意味？」

「ああ、そうか。君はずつと世俗から離れて生きてきたんだよね」

「だからちよこちよい常識に疎いのか」

「うふ、だからいろいろ教えてほしい。おねがい」

「これからs·ida e剛毅です

そう言つてわざわざまでにこつともしなかつたボッチャマの異端者、
鋼屋氷華がこちらに笑顔を向けた瞬間、俺は一瞬硬直してしまった。
それは精密機械や人形のように精巧で、制止した湖面のように澄んでいて、否、俺の知るどんな単語でも比喩しきれないほどこ、言葉で表現してしまうのが無粋な行為に思えるほど元

——綺麗だった。

俺が女の子の笑顔にこうも感銘を受けたのは初めてで、こんなモノ
がまだこの世にあつたんだとい、惚けてしまつた。

「？
ほむいの
埜？…どうした？」

「なんでもねえよ。つーかいいち人の顔をじろじろ見てんじゃね
えよ！」

「うめん…」

ああっ！だからそんなんに申し訳なさそうな顔をするなーもの凄
く悪い気がするだらうが…

「つ・・・」

「どうしたの剛毅。いつになくわたわたしてゐるよ…」

ヒーロー・ヴィン アンド テイキン ア ステップ アベッジ（後書き）

途中から？ 桂君の視点でしたね。
彼、最終進化するまでザ「設定です。」
因みに戊君は初っ端からチートです。
最早チートです。

ア シードリング オフ ア リトル ラヴ ストーリイ (前書き)

剛毅君の初恋&嫉妬心

サブ翻訳 『小さな恋物語の芽』

Side 剛毅

ア シードリンク オフ ア リトル ラヴ ストーリイ

「どうしたの剛毅。こいつになくわたわたしてるよ?」

「うせえー! うてかわたわたって何だー! わけ分かんねえ擬音使つてん
じやねえー!」

葉矢は馬鹿みたいに長い間一緒にいるから俺のちよつとした事にまで感づきやがるから厄介だ。
しかもそれが大正解だから困りもの。

「?
モウイの
埜、わたし」

「つたりいから剛毅^{カウキ}つて呼べ。俺もお前のことはひょ・・・氷華^{ヒョウカ}つて呼ぶから・・・」

「・・・わかった。剛毅、わたしはお前達と一緒にいても余り役に立たないと思う。水が倒せるのは草でも倒せる。意味ない」

「そんなこと」

「んなこたねえよー! たまに草じゃ軽すぎて瓶にあまりダメージを与えられないことだつてあるんだ。それにこの中じゃ泳げんのお前だけだぜ?」

「そり? わたし一緒にいてもいい? 意味あり? うれしい!」

本当に、コイツは世俗から切り離されていなければ幸せな可愛い女子として生きていけたんだろうなと思う。

でも同時に、異端であったからこそ俺たちと接点がもてて、無垢で在り続けられたんだろうと考えてみるとここはやはり異端であることに感謝をしたい。

「あ、そうそう。剛毅が呼び捨てなら俺も葉矢^{リカジ}でいいよ。むしろそつちの方がいいや」

「分かった。葉矢！」

・・・少し、いらっしゃった。

何に苛ついたのかは定かではない。

嫌、多分大体薄々おおよその検討はついている。

でもそれに対して違うと言い切つて別の理由を探す、俺。

――なんか、凄く情けない。

ア シードリング オフ ア リトル ラヴ ストーリイ（後書き）

バトル関係無しに剛毅君のわたわたを書くのが楽しい。

剛毅君のちっさな嫉妬心が最高に可愛い。

近々氷華ちゃんのイラストでも張ろうかと日論んでいます

ノウイング イーチ アザー アンド テイキング ア ステップ フォーワー

タイトル翻訳『互いを知ることと、共に前へ進むこと』
今回、一人称視点解除

ノウイング イーチ アザー アンド テイキング ア ステップ フォーワー

三人は日が暮れてきたのを確認し、手頃な高さの木に登つて寝ることにした。

「あなたたち、そもそもどうやってわたしの居場所わかった？」

「Uのレーダーを使つたんだ」

葉矢はバッグから彼の手の平より少し大きいくらいの機械を取り出した。

「なに？ それ

「これは俺たちみたいなのをみつける機械だよ。今映つてる三つの赤い丸が俺たち」

映し出されていたのは黒地に螢光色の縁で線を引いた方眼紙の様な画面の真ん中に三つの丸。

氷華はそれをとても簡易的でわかりやすいと思つた。

「これを作つたのが俺たちの本部にいるルイちゃん。ルイちゃんのポケモン部分はレアゴイルで、本名は西園磁琉^{さいおんじゅう}生子^{るいこ}。本部で役に立つ機械を沢山作ってくれてるんだよ」

「・・・本部？ 組織なの？」

「ああそつさ。ま、頭が誰かは知らねえがよ」

太い枝に座り、幹を背もたれのよづとして体を預けていた剛毅がぶつきらぼづに言い放つ。

「俺たちの目的は俺たちみたいなのに対する差別・偏見をなくすこと」

「うん」

「俺たちみたいなの力を欲しがって悪用しようとしている輩はたくさんいるからね、そういう奴らから同胞を保護すること」と、目をつけられる前に仲間に入れること、必要とあらばそういう奴らを倒すことなんだ」

「・・・ふーん」

「お前今の話、理解してつか?」

「それは分かつた。私が思つたのは、私達みたいなのは居場所がなかつたから、居場所がもらえると思つたらどんなヤツにだつてついで行つてしまつてこと。そういう気持ち、知らずにそんなわたしたち同胞の人生を駄目にしようとする奴らが許せない」

「そうだよ、氷華。溺れている者、自分が溺れていると思っている者は藁でも、それこそ毒草でもつかみ取つてしまつ。だから俺たちが命綱を投げるんだ」

「ケツ。つつても俺ら、下つ端中の下つ端班だけだな

「なんでそうこう」と言つかなー……」

「じゃあわたし、あなたたちに付いてきて正解だつた?」

「ん、まあな」

「そういう輩だけじゃなく、氷華ならほかの悪い人間にも**攫**われそ
うだけどね」

「ほかの悪い人間?」

「うん。氷華、綺麗な顔してるから売られたり**愛玩**されたりしそう
だよ。俺たちはぱつと見人間ととしてかわらないし」

「葉矢つーお前!」

「剛毅?間違つたこと言つたかな?俺」

「つ…あーもういー寝るぞ」「うー!」

ノウイング イーチ アザー アンド テイキング ア ステップ フォーワー

今回も剛毅くんのわたわたが見れた(?)よつた感じですねー
ルイちゃんのレーダーはまあ、漁船についてるアレみたいな?

インスイテント ザッシ アイ ティードゥンシ メンシ（前書き）

サブ翻訳『私が意図せず起きていた出来事』
今回も引き続き一人称視点解除です

インスイテント ザッシ アイ ティドウンシ メンツ

少し時間がたつと、氷華は自分がいた少し高めの枝から事もあらうか剛毅のいる太い枝に降りてきた。

「んなつー。」

そしてそのまま彼の下腹部あたりに頭を載せた。

「おい氷華てめえ・・・ん？」

「あつたかい…」

人肌より少し暖かいヒゴザルの異端者、剛毅の体温に惹かれて降りてきたりしい。

彼はそのまま何も言えず、黙つて彼女の頬に手を添えた。

「月明かりで白く照らされて…本当整つた顔してるな、こいつ」

彼の足の間にある氷華の体は湖畔での食生活を物語るかのようにほつそりとしていて、彼が少しでも足に力を入れたら潰れてしまいそうだった。

「君は人の顔をじろじろ見るどいつもか手を添えているじゃないか、剛毅」

「うわつ、葉矢！」

「しーつ。起きあちやうよ」

「・・・」

「剛毅つて眉のラインがくつきつしててすこしあつめの女の子が好きなの？」

「つせえな・・・」

「やっぱ水タイプつて体温低いの？」

「俺から見たらたいていの水タイプ、草タイプは低体温だつたの」

「そうだったね」

「お前はナエトルだしな」

「そうだね。ねえねえ、俺も暖めてよー」

「よゐな氣色悪いー！」

「氷華はいこのに？」

「つせえー！」

「あはつ、冗談だよ。俺はへんにあつといと体に良くないし」

葉矢は剛毅を下の枝から見上げ、悪戯っぽく笑う。

剛毅は彼の発言に突つ込みを入れる際も氷華を落とさないよういつも足で支えている。

その光景は誰が見ても微笑ましいと思つだらう。

「俺たちもそろそろ寝ようか

「だな」

「ジギ、セガホル」

ג'נ'ר'

―――人の少年は、田の疲れを癒すよう、そつと目を閉じた――

ア シンプル ブレイクファスト（前書き）

サブ翻訳『簡素な朝食』

今回も…以下略

ア シンプル ブレイクファスト

翌朝剛毅が目を覚ますと氷華と葉矢が下で朝食の準備をしていた。といつても剛毅のヒョザルと氷華のポツチャマの協力を得て食べられる木の実の葉を煮込んでいるだけなのだが。

「葉矢！コイキング何匹必要？」

「あと二匹かな」

「わかった！」

氷華は木のてっぺんから見える距離にある川で彼女のものと思われるブイゼルと一緒にコイキングを捕まえている。

無論、両者とも素潜りで素手だ。

剛毅は特に意味もなく”今起きた感”を装い、木から飛び降りた。

「あの野生児嬢ちゃんは元気なこつたねえ。俺なんか人の生活に慣れすぎて腰と首が痛えわ全く」

「クスッ、俺が先に起きてほうとしたとしていたらや、あの子いきなりむくっと起き上がり自分の寝てた場所を確認すると真っ赤になって木から落ちちゃったんだ」

「マジで？」

「うん。それで川に走つていってポツチャマと泳いでたよ」

「アイツにも性差つてもんがあるんだなあ

「葉矢ー！採つてきた… よ」

「おっ、お疲れさん」

またしても剛毅の顔を見ると頬を染め、走り出そうとする氷華の背中に向かって葉矢はすっと右手をさしのべた。すると彼の手に沿つて袖口から何かの植物が生え始め、驚くべきスピードで氷華に追いつくと彼女の細いからだを絡め取り、一気に彼の皿の前まで引き戻した。

「わっ…」

「走り回るのも良いけれど、とつあえず朝食にしてよつか。そのゴヤキングも焼くからね」

「はーい…」

ア シンプル ブレイクファスト（後書き）

分かるとおり、氷華ちゃんはリッシ湖の湖畔に住んでた子です。彼女の手持ちはポツチャマを始め、そこに住み着いてから手に入れた彼女の兄妹。

ブイゼルーいぜる
ポツチャマーチヤマ
ギャラドスーらじす

I t w a s w h a t I a l w a y s w a n t e d t o s a y .

葉矢と剛毅の手持ち紹介的な？

友人に、カタカナ英語読みにくいと言われたのでちゃんと書きました。

サブ翻訳『それは俺がいつも言いたかったこと』

今回は葉矢君視点です。

朝食を済ませた俺たちはコイキング達の骨を魚。ポケモンの供養よろしく川に流した。

綺麗な水に少しずつ流されながら沈んでいく彼等の骨を感謝と慈しみの目でみつめる氷華は年齢にそぐわない綺麗さを持つている。

少し進んだところでなれ合いのためにもポケモン達をボールから出してみた。

木の実をつつく俺のナエトルと氷華のポッチャマはどこかお互い警戒しているようで可愛らしい腹の探り合いをする。

わざと相手の方に木の実を押しやつたり食事をいつたん止めて相手をじっと見ていたり。

剛毅のヒゴザルなんて氷華のギャラドスと打ち解けて川を乗り回しているくらいなのに…

――本当に、彼等は見ていて飽きない。

「おいデッパ、リキ助、エテ吉ーそろそろ戻れ」

剛毅が彼のビッパ、ワンリキー、ヒゴザルを呼び戻してボールに入れる。

にしても彼のネーミングセンスはどうにかならないものだろうか。ビッパのデッパもそうだがエテ公だからエテ吉だなんて安易というか酷すぎる。

エイパムを見つけたらなんて名前にするかなんて聞きたくもない。

「こせる、ひどかー戻るよ！」

その点では「」の一人は共通しているだろ。」
最後の三文字をとるだけって…

名前が三文字以下のポケモンや三文字にすると小字の所為で発音不可能なポケモンはなんて名前にするつもりだ。
ブニヤットとなんて”ニヤツ”なんて擬音じみた名前になりそうで怖い。

「ナーハ、ウソハ、ロロリー。戻つておいで」

“なんだかんだ言っておきながらお前はどうなんだ”
だつて？

人によって価値観は違うものだから健全なウチは何でも良いと思つ。只、モチーフが酷いものに関しては突っ込ませて欲しい。そこの所よろしく頼みます。

I t w a s w h a t I a l w a y s w a n t e d t o s a y .

三人の手持ちは話が進むごとに進化したり、増えていつたりします。

剛毅

エテ吉 ヒコザル

デッパ ビッパ

リキ助 ワンリキー

葉矢

ナーエ ナエトル

ウソハ一 ウソハチ

コロリー コロボーシ

Please notice that your physical is

サブ翻訳『自分の身体能力が信じがたいほどものだと気づいてくれ!』

今回も引き続き葉矢君です

「そ、着いたよ

「何処に?」

「だから、本部」

氷華が目を丸くするのも無理はない。

俺たちの本部は普通の人間に感知されることがないよう、地下通路のさらにしたまで掘り進んだところにあるからだ。
無論、地表からは入り口なんて普段使っている者すらレーダーを使って探知しないと見つけられないほど。

「まあ見てなつて。お前入り口見たらいビビるぜっ!」

田を「じじ」とこすつて必死に入り口を探す氷華の足下に葉っぱ力ツターの葉を突き刺し、上手く刺さる位置を探す。そこそこが出入り口の蓋のフチなのだ。

「氷華、どいて。ここ開けるから」

「あっ、うん!えつ?ここ?!!」

葉っぱ力ツターの葉を差し込むことによって地面と蓋の間に出来た隙間に俺の意志で動かせる蔓をのばして蓋に絡ませる。

「・・・ふう」

この蓋は何度持ち上げても重い。氷華の体は軽かつたと改めて実感

する。

蓋を開けると長い梯子^{はしら}がある。もちろん人間の体力、筋持久力じゃあ降りきることは難しい。

そう思つて剛毅を見れば腹立たしいと感じる人もいるだろう。彼の場合ベースが人間のヒコザルなので木や梯子の上り下りは普段歩いているのと何ら変わりない様子でできるのだ。

一方氷華の具合はどうと・・・

「会図してねー。いくよーっ」

と梯子の端の縦棒を両手でつかみ、その力を緩めることで一気に何段も降りていく。

俺たちがかなり降りてから着いてくるという形になるので正直かなり怖い。

というか君達はエイパムか。

A new encounter (前書き)

サブ翻訳：新しい出会い

毎度毎度多重視点ですみません！――！

A new encounter

「さ、着いたぜ。もう気にせず落ちてこい！」
「はーい！」

最終的には梯子を蹴つて氷華は飛び降りた。高さ十メートル弱から飛び降りるだなんて俺にそんな勇気はない。

「かえったか。剛毅、葉矢。そいつが今回保護するポッチャマなのか？」

「おう、なかなかのじゃじゃ馬さんで手こずったぜ」

ここから氷華視点

私達を迎えたのは私より少し上くらいの少年だった。
だが彼の出で立ちには少々人目を引く物がある。
まず、大きな羽。ズバットのものだろうか。

それにして頭に生えている一つのピンとどがつた耳、そして目に幾重にも巻かれた目隠しの布があまりにも私の中の常識から外れており、面食らってしまった。

「なんだ、人のことじろじろ見やがって。穴が空いてもおかしかねえぞ」

「いえ…」

「この変な人は羽山影惟。はやま カゲノブ ポケモン部分はズバットで、何処に隠れても場所を感知されちゃうんだ」

「大抵暇してつからとりあえずなんかあつたら頼れ。なんだかんだ言つて助けてくれつから」

「お前ら、曲がりなりにも年上のヤツに対する態度がそれかよ…」

「影惟はアジトを広げる」とと、洞窟とか暗くて危なつかしいところの探索を任せてるんだ」

「ズバットの超音波・聴覚で探索が他の誰よりもより早いんだぜ」

「あつや。じゃ、俺たち報告行つてくるからこの子を案内してあげといてね」

「なつ、おい！ちょっとまで、葉矢！剛毅！」

「そいつに向かしやがつたら口づけん疑惑を偵察部隊全員にばらまくからなー」

「ぞひけんじやねえ！」

なんというか、有能なのに立場が低そうな人だ。

They are not my parents but who gave

サブ翻訳「彼等は私の親ではないけれど、産んで、ポケモンをくれた人たちなの」

They are not my parents but who goes v

「おー、ポツチャマ」

「何」

「お前、親から名前はもらつてるか?」

「親が私が生まれたら付ける予定だつたと聞いた名前ならあるけれど、その名前は名乗つたことはない。今のところ使つてるのは名字「ぐら」」

「もうひとつはいるんだろう? 羨ましい限りだぜ、贅沢言つな

「羽山は…」

「ま、人それぞれか。んじゃ、名乗りたい方の名前を教えてくれ

「鋼屋永華」

「れいとつべームでもくらうそつな名前だな」

「兄妹と一緒に考えた」

「お前とお前の手持ちは無教養でもないんだな」

「両親が残したのは本と字の読めるポツチャマだから、二人で勉強して、家を出てリッシ湖の湖畔に移り住んだ」

「・・・お前は、親を恨んだことは無いか？」

「何で？」

「お前のことを、放棄したんだぞ」

目隠しのせいで羽山の表情ははつきりとは分からぬが、彼が親に抱いている思いは軽いモノではないらしい。

「でもいろんなモノを残してくれた。それに、私は彼等を知らないから…彼等についてどういう言える筋合いなんて無い」

「もらつた名前は名乗らないのにか？」

「育ててくれた人は親だけど、そうじゃない人たちは私にとつて親じゃない。だから知らない人たちからもらつた名前は名乗れない…」

「お前は…」

「羽山は、何で親のことにはだわる？」

「…気にするな」

わたしたち
異端者の身の上のことだらうから何となく分からぬでもない。

きつと、人に話しづらい何かがあるのだろう。

それは異端者である限り剛毅だつて葉矢だつて同じようなことなのだろうと思う。

もつとも彼等は表に出さないが。

羽山に案内されて回ったこのアジトはとても広かつた。

こんな規模のモノが私達の足下にあったのかと思うとある種の恐怖感のようなモノがわく。

幼くして親に棄てられた同胞達を拾い、彼等に十分な教養を与える教育施設まで在ったのだ。

サブ翻訳：“鋼のメカニク”、レアコイル

「エリは…元々誰が始めたの?」

「オレは会つたことはねえがカントー地方の最強さんだとよ

「カントー地方?南の方の?」

「ああ。だが、とんだ自由人らしくてよ、此処のトップは違う人がやつてるぜ」

その人は、どんな思いで此処を作つてくれたのだろう。
此処までするといふことは、その必要があつたとふんだからではないのだろうか。

「ほれ、着いたぜ。此処が研究室だ」

最後に連れてこられた部屋は所謂【現代科学で実現できうる限りの最新設備を搭載した】研究室だった。

というか俗世間を殆ど見たことがない私がその場所を形容できる言葉はその他にない。

見たこともないようなモノがたくさん並んでいて、私はただただ唖然とするのみであった。

「あら、影惟君。貴方また案内係を押しつけられたのね。その子は?見たところ水系ね」

何人の電気タイプやエスパータイプと思われる研究員が自分たちのしていることに没頭する中、頭の回りに銀色の丸いポケモンが飛

び交っている眼鏡の女性が私達に気づいて話しかけてきた。

ねじの形をした耳飾りと鋼のような質感をもつ色をした髪の毛と瞳、

そして大きな丸い眼鏡がとても印象的だ。

なんというか、硬質な色彩が一番際だっている。

彼女は唯一この研究室で機械に混じって鉄色をしていながらも決して此處の空氣に埋もれては居なかつた。

「コイツは今日葉矢達が保護してきたポッチャマだ。名前は…」

「は、初めまして。鋼屋氷華…です」

「敬語を使い慣れてないなら無理しなくても良いわよ、氷華ちゃん。私は西園磁琉生子、レアコイルなの。よろしく」

「てめつ、オレには敬語ぬきやがつたな！」

「あら、大人気ない。生き物は野生に近ければ近いほど尊敬に値する人物っていうのを本質的に見極める力があるのよ」

「オレは値しないってのかよ…」

「いや…その…剛毅達が『ズバットの人にはあんまりへりくだらなくていい』って…」

「あいつら…」

「もう、そんなんだから後輩達にも下に見られちやうどじやないの

彼女が羽山と話している間にも鉄色の丸いポケモンが私の周りで不規則に飛び回つている。

時折止まって手の部分と思われるH字型磁石を「あら」に向けてくると、少し気分が悪くなつて指先がぴりぴりする。

「Hのポケモンは… 西園磁…さんなので…すか?」

「うーん、この子達は厳密に言つと違つたよな。私の分身みたいな?私と意識が少し繋がつてるの。もしかして気分悪くなつちゃつた?この子達、磁波をゆがめて飛んでるから電磁波に慣れてなかつたり敏感な人はそうみたいなのよね…ごめんね?」

「いえ…」

「Hのヒト、優しそうだなんて思つてねえか? 氷華ア…お前この女が実際に請け負つている部門がなんだか考えてみろい…一日中機械いじつて修理したり作つたり改良したりしてんだよ。人呼んで【鋼のメカニック】様々だぜ。対人なんてまともになつてるわけがねえ。ほつとんど初めて見る種類の異端者^{ヤツ}への好奇心だつつの」

「影惟君、余計なことを耳打ちするんじゃないの」

「ケツ、スルーしてくれい」

つてなわけでルイちゃん登場です。

頭の周りで「イルが飛んできます。

設定 銀髪を肩胛骨の下あたりまでに伸ばしてハーフアップにして
いる。身長はやや高め。今時珍しいまんまる眼鏡。本部に引き取ら
れるまでは電磁波を操って周りの機械を壊しまくる手の付けられな
い子だった。なぜか電磁砲が使える。

サブ翻訳『「未来の災いを視る者」アブソル』

「帰つたぜ、同胞を連れてな」

剛毅が報告をしに来た相手はその小さな部屋の真ん中に置かれた事務イスを陣取る一人の白と藍色の異端者。

「……おかえり、剛毅に葉矢。私の予想通り。ポツチャマだつた?」

彼女は顔を上げることもなく淡泊に答える。

「はい!班長の読み通りでした。何故班長は種族まで分かるのですか?」

「かしきまらないで良いよ、葉矢。只の勘さ。連れてきていないところを見ると今頃どこのズバットにでも案内させてるのかい?」

少し、口角を上げて若葉色の少年の質問をあしらう。その臉は二人の少年が入室したときから閉じられたまま。だが、その答えに朱の少年は低く言葉を返す。

「…その勘が何回続いてんスか」

「私がアブソルだからかな?なんとなくだよ」
だがその言葉にも、藍色の少女はその場しのぎのように目を開じたまま、人差し指と親指でさいころを弄びながら答えた。

「アブソルって確か災いを予知するポケモンでしたよね」

「剛毅にしては鋭いね、何か引っかかる」とでもあったのかい？」

少女の口角が元の位置に落ち、閉じられていた目が開く。さいこりを弄ぶ人差し指と親指も制止する。

「・・・何でも無いッス」

朱の少年が、藍色の声にじみ出る迫を感じ、引き下がった。

二人の少年が部屋を去り、中央の椅子に座る少女はまた一人になつた。彼等の足音が十分に離れるまで待つと、彼女はやつと一息付けるのだ。

「クスツ、何はともあれ良くなってくれたよ。未来の殺人鬼を野放しにするところだつた…」

「おい氷華、大丈夫か」

「…」めん

私はその後、ぼうつと影惟カゲノブと琉生子ルイコの会話を聞いていたうちに倒れ

てしまつたらしい。

「お前、機械とかの電磁波に敏感なんだな」

「うそ…頭が、まつりとしてくる…」

「ずっと世俗から離れて生きていや慣れねえよな

」

今居る場所は寝台が四つ並んでいて、私は一番ドアに近い方の寝台に寝かされている。

影惟が運んしてくれたのだとか。

—ガラツー

葉矢と剛毅が入ってきた。

剛毅はけだるそうな表情で眉を少し上げながら口を開く。

「よっ、ノブ

「略すな…」

「お前…やっぱ口つづく

「違つ…断じて違つ…」

「言い過ぎだよ、剛毅。大丈夫、俺は人の趣向を否定するつもりはないから」

「だから違つつてんだろ！誤解だ！」

「氷華、無事か？お前の貞い」

一ぱしほー

影惟のつばさでうつが私の横に来た剛毅にクリーンヒット。さすがに剛毅もやり過ぎたと反省しているらしく。

The handled item · (前書き)

サブ翻訳『渡された物』

The handled item .

「紫音^{シオン}、呼んで欲しい子がいるんだけど」

藍色の少女は、誰もいないはずの空間に呼びかける。

「それはアジエーアの少女? インディゴの言葉にウイステリアは答えます」

突如藍色の傍らに現れた藤色の少女は問う。

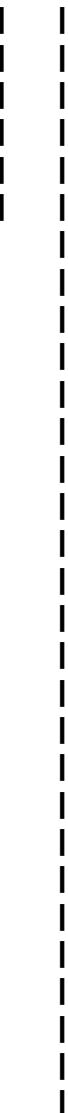
「察しが良いね。やつぱりあの子は紺碧^{アジエーア}か、頼めるかい?」

「ウイステリアは確認します。それは北の原点、三色の異端の内、青の少女?」

「でなければ呼び出しましないよ」

「了解です。ウイステリアは実行します」

和氣藹々としていた仮眠室にて



「うぐう……」

氷華が、突如呻いた。

「氷華？！」

彼女に駆け寄る剛毅を、葉矢が制する。

「剛毅、落ち着いて」

「なんだよーおい、はなせッ」

「“呼び出し”だよ」

頭を抱えてうずくまる氷華の額に開眼するように紫の宝玉が現れる。

「うう……ううあああああああう…」

由田が黒く濁り、瞳はこもつたように由田へ光る。

すると氷華は意識が断絶されたかのようにぴたりと口づのをやめ、ゆっくりと立ち上がった。

「——颶さん……ですよね？」

「……厳密には精神のみであるとウイステリアはヴェルジュエに答える

ます」

「班長の差し金か…てめえ、そんな強引に身体奪つこともねえだろうが！」

「アジェーラの精神が痛みなしに乗っ取れるほど氣迫で脆弱ではなかつたためであるとウイステリアはヴェルミリオンに答えます」

今にも自分の班長の元へ乗り込まんとする剛毅を制しつつ、葉矢は氷華を見送った。

急に眠りから覚めたように視界と意識を取り戻した私の前にいたのは初めて見る人。

薄暗い部屋なのに、相手の白い髪と上着だけでなく側頭部にはえる藍色のツノ（？）までもがはつきりと見える。

「初めましてだね、ポッチャマ。君の名前を教えてくれるかな？」

「だ…誰？」

「私は葉矢達が所属する班の班長、しらかわアイ白川藍」

「歩近づいてくる」と、白川の迫力は倍増した。

白と藍色でも構成された中に深紅の目が私の視線を釘付けにする。

「あ……」

「だから、名前を教えてよ。紺碧の原点やん」

「は、鍋屋氷華」

相手の言つたことの意味は理解しかねるが、ここで彼女の意図に反した行動を取れば殺される気がした。

「ふうん……また随分と種族を意識した名前だね」

そつそつぶやくと、白川は真っ白なズボンのポケットから桃色の薄い機械を取り出した。

「氷華、コレを君に。出合つたポケモンや異端者を記録していく機械、ポケモン図鑑さ。こいつを所持できるのは各地の“三色の原点”だけ。君こそが私が探し続けた北の最後の原点、青なんだよ」

「えつと……？」

「異端の図鑑所有者、北の最後の一角がみつかったよ……ソレはいざれ西の、南の原点達との絆にもなるだろ？。だから決して手放さないでいて欲しい」

「……はい」

「良い返事がもらえて嬉しそよ」

――――シンオウ地方、異端の図鑑所有者がそろつた。

The handled item · (後書き)

ヴェルジュエ＝草木などに用いる緑色の表現

ヴェルミリオン＝朱色

アジエーア＝紺碧、青色

ウイスティリア＝藤色

インディゴ＝藍色

一颯紫音ちゃんに關しては、次らへんで…

My purpose of cooperation (前書き)

サブ翻訳 私が協力する理由

My purpose of cooperation

「ウイステリアは陳謝します。契約のため、図鑑譲渡のためとはい
え精神いえ、肉体を乗つ取つたことに対して。申し訳ありません」
白川の後ろから声がしたので急遽そちらに注意を向けると、黒目で
ある位置が白く、白目が黒い藤色の異端者が居た。
とはいえこの部屋から出入りする物音はなかつたのではじめからそ
こにいたらしい。

白川藍に圧倒されすぎてもう一人その場にいることにすら気がつか
なかつたのだ。

「貴方は…」

「一颯紫音。いぶき シオン自分はエーフィの異端者であるとウイステリアは名乗
ります」

「そうだ、図鑑を渡すついでに初仕事を頼めるかい？」

「ええっ…と？」

「葉矢達に言えれば分かるから」

「は・・・はい」

「ウイステリアは手短に話します。ソノオタウンの花畠周辺の林に
不審人物。人外を利用してゐる模様。ウイステリアはアジェーアに
伝言を要求します」

「ソレをそのまま葉矢達に伝えればいい?」

「付け足し。行動はなるべく人に対しては秘密裏に」

「わ、わかった」

「ウイステリアは同行する許可を要請します」

「・・・森の方で?」

白川が一颯を見る目つきが変わった。

『何を期待してんだ』とでも言つてゐるようだ。

「...まあいいや、私に見えるのは災いだけ。幸運なんて予測できないよ。勝手に行くといい」

「ウイステリアは...恐縮...です...」

「ふーん、ソノオねえ...」

「へタしたら花粉症にでもなりそうな町だよな」

「えつと...どんなところなの?あと、仕事の内容って...」

「ん?簡単に言つと不審者とゾンバチやつて利用されている同胞を
組織に引きずり込む」

「剛毅、説明がそのまんまやられるよ...」

「間違つてはいねえだろ」

「ヤーだけどわあ...」

My purpose of cooperation (後書き)

次回からシンオウ原点組 + エーフィのチームが動きます。
不審者 = ギンガ団でおκ

The "PSI controller of sun"

サブ翻訳『太陽の超能力者』エーフィ

のソノオタウンと云う町は悪く言えば剛毅が言つたとおり花粉症になりそうな町。

良く言えば、いや、ひねくれた見方をせずにいれば、美しい花畠の町だ。

「ウイステリアは要求します。一度に三人のテレビーターはさすがに堪えたのではしばし休ませて欲しい、と」

「ケツ、率直にストレートに普通に言えっての。つかれたからやすませりーって」

剛毅が追い払うよつた仕草をすると、一颪はどこかへ去つていった。

そこは、思わず深呼吸をしたくなるほど澄んだ空氣で満たされた
いふ。
——

語彙が貧弱な私にはせいで木々のゴーティアとしか言つようのない場所。

地名は、ハクタイのもつ。

私がここに来た理由は一つ、それはあの藍色インディゴとの契約に関係するこ
と。

私は彼女に兄妹達を自由に探すことを可能にする代わりに彼女に協力すると誓約をかわした。^{イーブイ系}

なにせ兄妹達はばらばらに点在しているため私個人の力では思いたる場所総てを回ることができないため、彼女の権力を盾に自由に搜索をさせてもらうしかなかつた。

その代わりの丁稚奉公だ。^{でいじめいわくわく}

私が此処に着いてきた理由、それはこの森のどこかにイーブイの進化ポイントがあつたから。

そこで進化するイーブイは確か…

「またお前らか、このピチピチタイツ宇宙人」

「懲りないね、ポケモンバトルでなら勝てると思った？」

「「甘いよ／甘えよ」」

「所詮人外のガキどもが！お前らの戦闘能力はともかく、ポケモンバトルなんかする脳がどこにあるってんだ！」

双方、ポケモンを繰り出す。

ピチピチタイツの変質者側からはニャルマー、スカンプー。

剛毅＆葉矢ペアからはビッパとウソハチ。

「ケツ助かつたぜ。いくら俺でも連中どバトるのはゴメンだからな」
だがそのまま他人のものと思われるポケモンを抱えて逃走するピチ
ピチタイプの変質者が一名。

「どこに行くつもり」

彼の腕を、冷たく白い少女の手がつかみ上げる。

「他人の家族を奪つてまで何がしたいの」

「つは…はなせつ」

「聞いてる?」

見れば、少女に捕まれた部分がどんどん凍つっていく。

「うわああああつ、このつ、バケモノがッ!!」

その台詞を聞いたとたん、何かのスイッチが入ったのか、氷華の瞳
から情の色が消えた。

「何だ…お前、黙りやがつてえええええ?ー」

氷華は、躊躇無く凍つた男の腕をばきりと肩口から独立宣言をさせ
る。

凍つた腕は、男の痛覚を奪つたままカッターナイフの刃でも折るよ

うにあっけなく外れた。

主人公ちゃん…世俗離れしてる所為で躊躇ねえ…
道徳的な考え方という基盤が染みついてないんだ…
怖い、怖い

What do you need to understand about

サブ翻訳 君がちゃんとわかっていなければいけないこと

What do you need to understand about

「跳ベツーデツパ」

「ウソハー、げんしおのちから

ウソハチが地面を強く蹴り、相手のスカンパーの足下からその震動で石や土が跳ね上がる。

「クッ…一瞬で戦闘不能かよ」

「まだ俺のニヤルマーがいるぜーみだれひっかきー。」

相手の攻撃に対し、葉矢は呆れ顔。

「ウソハチを何タイプだと思つてるわけ?」

「デツパ、ひつさつまえばー。」

落ちてくる勢いに載せてデツパがひつさつまえばーをニヤルマーの背に当てる。

無論、一撃で戦闘不能だ。

「オラ、とつとと略奪したモノおいてけよ」

「戦つても勝てない」とぐらつ分かつててやつてるへ。

二人の少年は、余裕の表情でピチピチタイツの変質者、もといギンガ団の下つ端に退却を促す。

「さーてと、氷華ー！待たせちまつたか……つて……お前！」

剛毅の目に映つたのは、大量のモンスター・ボールの入つたか」と…

凍つた人間の腕を片手に持つた水色の少女。

「…」

剛毅は何も言わず、彼女の頬を張つた。

彼の悲しそうな、怒つているような、泣きそうな視線に気づき、氷華は持つていたモノを取り落とす。

「あ……わたし……なにを……」

だがそれは、剛毅にとって直視し辛いものだった。

「剛毅、後でこのポケモン達を持ち主の人たちに返そうねって……氷華？」

先ほどまで人の腕をつかんでいた右手を左手で握り、がちがちと歯を鳴らして震える氷華。

「（わたし……初めて人を……壊した……？）」

葉矢は、何も言えずに後ろを向く剛毅を押しやり、氷華の手を両手

で包んだ。

「ちゃんとわかったね？初めて人を壊した感覚。自覚したら怖かつた？自分の力がどういうモノか分かったよね？こんなに震えて、自分で怖かつたでしょ？」

葉矢は氷華を落ち着かせると、先ほどとは打って変わった強い口調で氷華をたしなめる。

「でも、それはいけないことなんだよ」

「うん…」

「何、人外に負けたって？」

「ハ、ハイ…奴ら、ポケモンのレベルを上げておりまして」

「あたしは言い訳を聞いてやるためにいるんじゃないよ」

赤毛の女が厳しい一言を放つ。

「アンタはどうしたんだい。左腕の肘から先は何処にやつた」

「水系の人外に…凍らされて…」

「水系…ねえ…」

女は冷たい笑みを浮かべる。

それは先ほどまでの部下への嘲笑とはまた違つたもの。

「相性抜群じゃ ないか…」

What do you need to understand about

作者が一番好きなギンガ団幹部はマーズだったりする。
可愛いじやん、あの子。

Heading to a battle (前書き)

サブ翻訳『戦いに向けて』

今回のスタートは紫音ちゃんです

Heading to a battle

森の中を暫く歩き続けると、大きな苔生した岩が見えた。

岩の上にテレポートしてみると、案の定岩に寄りかかって寝ている一人の異端者がいる。

まだ幼い姉弟のようだ。

一人はふわふわしたマフラーを巻き、頭から大きな茶色の耳がはえている。

マフラーと同じ色の尻尾から、まだ進化前のイーブイのようだ。

もう一人は植物の葉のような耳を生やし、となりで寝ているイーブイに身体を預けさせている。

弟と思われるイーブイの手元にあるかじりかけのオレンの実から、この二人がこの森で細々と生活していたことが分かる。

「起きるまで… ウィステリアは見守ることにします…」

岩の反対側に降りて、そろそろ来るであろうと予知したG団の下つ端を迎える準備をしよう。

「ガサツ」

「ウィステリアは以外と好戦的なのです」

「氷華、戦う準備はできてる？」

「え・・・？」

「連中が走つていった方向、プロペラが立つているところを見るにおそらく風力発電所。今回の奴らの拠点らしい」

「・・・うん、大丈夫」

「氷華、お前は異端者同士が戦う際のルールを知ってるか？」

「えっと・・・ダブルバトルだっけ？」

剛毅の表情は安堵の色を見せる。

「そうだ。ノブから聞いたのか？」

「うん・・・」

異端者同士のバトルのルールは至極単純。

異端者が自分のポケモンと共闘するのだ。

つまり異端者の一対一のバトルならば一人と一匹VS一人と一匹と

いう風になる。

ポケモンをサポートに使つたり、自らがポケモンをサポートしたり、それぞれソロで戦つたりと人によつて様々な戦い方があるというわけだ。

「じゃ、行くか

「うん

「俺も久々に暴れようかな

L e t - s f a c e t h e b e a g n i n g (記書モ)

サブ翻訳 「さて、始めようか」

Let's face the beginning

「おい、お前らも探せ！確かこの森にも人外が居たはずだ！」

この清らかな聖地を荒らすG団達に嫌悪感を感じない人がいるだろうか。

ポケモンを取られるのではないだろうかと逃げ隠れしているトレンナーや、怯えて出てこないポケモン達にかわつて私が肅正することにしよう。

「貴方たちは、一体誰を捜しておられるのでしょうか」

「……」

私のかけた声に気づいたG団の一員は、当然のことのよう MONSTERBALLを構える。

「只声をかけただけの通行人に對して隨分と警戒しますね、ヒュイステリアは冷笑します」

「黙れ人外がッ！」

その一言を皮切りに、相手も私もMONSTERBALLを投げた。相手が繰り出したグレッグルを私のロズレイドが右手から出たつのムチで締め上げる。

グレッグルがぐつたりしたところで地面に落とし、このバトルに氣

づいた他のG団員達に向き直る。

「全員まとめてかかってきてもよしこじよとウイステリアは挑
発します」

「此処が…たにまのはつでんしょ…」

「みたいだけど…なんだか風が強すぎねえか?」

「そうだね、多分コレは“僕たちと同じ子”を使つてるんだが?」

「そうとわからやあ突撃すつか!」

「だね。いたずらに杞憂を募らせて作戦を考えて頭を痛めるよりも
その場その場の判断で行つた方が早いよね」

「…葉矢」

「何? 氷華」

「葉矢は、あのプロペラをスゴイ勢いで回して元手を止めてきて。
突撃は、私と剛毅だけでい」

「…良いけど、何で?」

「寒気がする。三人で行つても削られる戦力が増えるだけ。だからこの中で一番強い葉矢に確実に相手の目的を阻止できると思われる行動を取つて欲しい」

空気が、ずしりと重くなる。

これが仕事の現場なのだと三人は改めて実感するとともに、自分たちの力量に不安を持ち始めた時。

剛毅は顔を上げ、眉をひそめる氷華の頭を手の平でぽんぽんと叩いた。

「な、何？」

「葉矢の言うように杞憂慕らせたつて仕方ねえだろ？とはいお前の作戦は実行させてもらおう。だからな、葉矢。お前は安心して行ってこい。俺らなら多分、大丈夫だ」

「・・・うん！」

剛毅と氷華は発電所の正面へ、葉矢はプロペラが立ち並ぶ裏手へと歩いていった。

I'm not that weak though . . . (前編)

サブ翻訳
『わたしはそんなに弱くないわ…』

I - m n o t t h a t w e a k t h o u g h . . .

「よう、お二人さん」

「幹部が警戒するからとんでもない奴かと思ったのに・・・ザコ臭
つ」

発電所前で私たちの目の前に現れたのは電気系の異端者一人。

一人は長くて黄色い耳の生えた少年で、もう一人は小柄な少女。少女の方には青くて小さな耳が肩より少し下くらいの白い髪の毛の間からちょこんと生えており、それだけならば異端者とは判断がつかないが、頭より少し高い位置までできている大きな尻尾がそうであると外見から教えてくれる。

「貴方、水系でしょ？」

「・・・つ、そうだけど！」

「ホラ、楽勝だつて！ね？ 鋼太！」

「つたりめーじゃん」

図鑑をこつそり開いてみると、彼等はそれぞれパチリスとピカチュウの異端者であると分かった。

ピカチュウの少年は、かなりレベルが高いらしい・・・

「剛毅・・・」

「んな不安そうなツラしてオレを見上げるなつ。たとえ苦戦したつてよ、勝ちやこいんだ」

剛毅だつて不安じゃないはずがない。

私にそれを言ひ「」とこよつて自分を勇氣づかよつとしたのだひ。

なら、わたしだつて全力でこたえるほかないだひ。

「エハでもこー。せじぬよ」

「 めう めー。」

私どこのピカチュウの少年の言葉で、一気に空気が戦場のソレになる。

「クル///-出でおこで-」

「出で-ピカたれ-」

「たよつこしてつぜ、テッパ-」

「たのむよ、こざるー。」

先ず先手を取つたのは相手のパチリス。

仕掛けてきたいかりのまえぱに剛毅の「テッパ」がひつさつまえぱでかえす。

次に、スパークで私に突っ込んできたピカチュウをいぜるがスピードスターで足止めし、水流をのせた尻尾を回転させながら当てて戦闘不能にした。

「フウ、やるじゃねえか」

「鋼太、相手をバカにしそうだ」

「んじや、オレはあの青い嬢ちゃんとサシでいつかあ！」

「・・・来い」

いきなりかみなりパンチを構えて突っ込んできたピカチュウの少年を私は手に氷の刃を纏わせてガードする。

すかさずまわしげりの追撃が来て私の体は上に飛ばされるが、私の隙にいざるがかみなりパンチを構える相手の足下にれいとうビームを放つた。

「おつわあつと・・・流石にナメすぎたぜ・・・」

「はやく氷を碎けば？」

足元を固められて動けないピカチュウの少年に着地点から急接近し、膝で鳩尾みぞおちを蹴り上げる。

「がつ…」

彼が吐血した返り血が服につかなによつに肘で受けた。

「バカにしないで」

I'm not that weak though . . . (後書き)

バトル引也...

L e t - s j u s t d o i t . . . Y o u k n o w , s e r i o

サブ翻訳 「とつととやうひせ... ホラ、ガチで」

L e t - s j u s t d o i t . . . Y o u k n o w , s e r i o

「なんだ… やるじゃねーか

「手を抜いてるのはわかってる。心にもない」と言わないで

「心にもない事つて… 謙遜しなさんなよう、お嬢さん」

不敵な表情を顔面に貼りつけたままピカチュウの少年は私を見る。遠距離攻撃でもしてくるのかとおもいきや、拳に帯電させていた電気を足元にうつして氷を爆散させた。

「俺は鋼太。コウタ 雷鋼太イカヅチコウタだ！俺はガチでバトルができるとふんだ奴にしか名乗らねえ。出来ればお前の名前も教えるよ」

「いいよ。私は冰華。鋼屋冰華！どうこう理由であなたが連中に協力してるのかは知らないけれど、行く手を阻んでくる限り私は戦う」

「久々に全力で暴れられつぜ… シビレさせてやんよー！」

「上等ー。」

冷氣の拳と、雷の拳がぶつかり合ひ。

「自分と相手の力量の差がわかったならとつと退却してくださいなとウイスティアは促します」

「くそつ……覚えてろよ人外め！」

G団達が退却していくのを見届けると、すぐにあの姉弟がいるべき岩陰に行つてみた。

だがそこにはかじりかけのオレンの実がひとつ、転がつていただけだつた。

「まさかつ……」

もう……連れ去られてしまつていた……？
だが、私が抱いた不安は杞憂で終わつた。

がさつ

物音に振り向くと、そこにはあの姉弟。
弟の方は不安そうに姉の服の袖を掴みながら後ろに隠れている。

「つまり、守つてくれて……ありがとう……」

「そう警戒しないでくださいな。只の、ウイステリアの好意です

「・・・・」

――――――――――――――――――――

「……なんだよ、やっぱ水タイプに電気技はキツかつたつてのか？」

「ぐつ……」

「だが容赦はしねえよ」

鋼太のアイアンテール、もとい蹴りが氷華のこめかみを容赦無くえぐる。

L e t   s j u s t d o i t   .   .   . Y o u k n o w   , s e r i o u

バトル大好きー！

Evolution (前書き)

サブ翻訳 「進化」

「ううう…あッ…」

頭をやられた。

視界が霞む、音が聞こえない。

痛い。痛い！

意識だけは不親切にも途切れてくれない。

「くっ…うあ…」

まともに声が出せない。

衝撃が大きすぎる。誰か、助けてよ！

——剛毅だ

剛毅がいる。

そうだ、彼に助けを求めればと、いるべき場所に視線を移す。

「あれ？そつちはいいの？」

「ああ。やっぱ水タイプじゃ話にならねえ」

「んじゃ、最後は

「だな」

「なつ……やめ……る……」

二人はそれぞれ満身創痍の少年にアイアンテールを構える。
鋼太は右足を、パチリスの少女は大きな尻尾を。

嘘だ、やめて。

お願い！

剛毅はもうボロボロじゃない！

でも鋼太はやる。

確実にアイアンテールを剛毅にぶち当てる！

——私に選択肢なんて残ってるはずがない。

「「アイアンテールっ！」」「

二人の攻撃が当たるべき的の前に何かが立ちふさがる。

それは氷の刃。氷華の腕。

「そんなんで受け止められるとおもうなよっー」

勿論、このままの状況であれば、雷鋼太は至極当然のことと言つた
までだ。

だが、ニヤルマーの田の「」とく雪日の天気の「」とく戦局は変わるものである。

氷華の全身から内に溜めておくことが不可能になつたエネルギーが外にまで溢れ出し、光となつて視覚化される。

氷華のポケモン部分が、さながら突然変異のように別のものに作り変えられてゆく。

この現象の俗称を、人は進化とつけた。

腕につく氷の刃が鋼に替わり、着ていたミニスカートのワンピースが形状を変える。

異端者の力の象徴に衣服にも現れる
例えば色。

水系であれば青 細であれば赤系などと衣服の色での分類が可能。

たとえは形

岩や鋼系ならば鎧のような硬度と形状を見せてくれるであろう。

氷華の衣服は水色のワンピースから深い群青がベースとなつた燕尾服へと変化する。

群青のネクタイ、シアンのYシャツ、そして水色の冰刃は紺碧の鋼
の手甲に。
ガントレット
ブレーク

透き通るような水色だった短髪は深い群青の長髪に。
その真ん中に額からV字に伸びる黄色い頭飾りが反対色のコントラ
ストによって鮮烈に映る。

鋼の手甲は生半可な物理攻撃など容易く防いでしまえる。
（アイアンティール）

氷、水に加えて鋼を操る事ができる原点。
氷華はもうポツチャマの異端者などではないのだ。

「メタルクローツ！」

彼女の手甲の両脇が肘側に伸びて刃と化して振るわれ、その威力を
知らしめる。

「私のポケモン部分はポツタイシ！氷、水、鋼を操使する者！」
（エレクトリック）

Reset and start it. (前書き)

サブ翻訳 「リセットして始めよう」

「つまつと……」これは何の冗談だ……？」

「なんでもかんでも一つしか回答なんてないでしょ……どうやらこの子の力に理屈なんて通じないらしいってことぐらいしかわからんない……」

氷華は何も言わず、両腕でメタルクローナーの構えを取った。手の甲を覆うほどサイズだった手甲は、V字に再び変形する。縁はすべてブレードが向き、長さは肘まで達していた。

相手の二人がそれぞれの利き手に電流を帶電させたのを確認すると、氷華は先ほどとは打って変わって穏やかな表情で後ろにいる満身創痍の少年に振り返る。

「少し、休んでて」

それこそ、彼が今まで見た中で一番優しい笑顔で。

「ちやま、いくよ」

前に向き直った氷華の田元は完全に相手にフォーカスしていた。

私はポツチャマをボールから出し、鋼太と向き合ひ。パチリスの少女は戦闘不能になつた自分のパチリスをボールに戻していた。

2vs2のバトルが、リスタートする。

「うおおおおおおおおおつー！」

正面から来た鋼太のかみなりパンチを左足を引いて躱し、前につんのめる背中に肘を入れる。

すかさず右からくるパチリス少女のスパークを跳んで避け、上かられいとうパンチを尾に当てた。

「ぐつ……」

「ううう……」

自分の体よりも体積が大きいと思われる尾を凍らされ、仰向けに倒れたパチリス少女の横に立った。

「さっきまでの自信はどうしたの？」

「あんたって……嫌なやつ……ね……」

「……少し寝てて」

彼女の腹にかかる落としを入れようとしたその時。

「うわあつ！」

私に向かって10まんボルトが放たれた。

「木崎に……手をつ……出すな……」

それは口の端から血を流しながら立ち上がった鋼太のものだつた。

「そういうわけにはいかな……いいつー！」

私の足首を掴み、パチリス少女が直接電流を流しこんできた。立て続けに電気技を食らつた私は為す術もなく倒れてしまう。

「無理をしないでよ、ピカ！」

「ひぬせえ。お前な……まともにあんなん食らつたらそれこそ本当に

……」

「御託はいいの……今のわたしに……余計な電気使わせない……で……よね……尻尾が……凍つて……微蓄電量が……使えないんだから……」

「なら休んでる。いいは、俺が力タつけてやる……」

「……」解

寝転がつて少しは回復したのか、とりあえず立ち上がることができた。

「物理技だけかと思つたら、特殊攻撃だつてかなり痛いじゃん……」

先ほどの鋼太とのバトルで受けた攻撃で、私は十分ぼろぼろだ。だが鋼太だつてかなりのダメージを受けているはず。

——のバトル、どうせ元転んでもおかしくはない。

「おまえが言つなよ。水タイプなら特殊技でも撃つていいや」

「むざむざ電流を体内にまで受けてたまるもんか」

「だよなあー」

再び、アイアンテールとメタルクロールがぶつかり合いつ。

Reset and start it. (後書き)

ピカの容姿説明 金髪ピカ耳。黒目で長身、かみなりのいしのペンドント。背中にピカチュウと同じ茶色のラインが入った黄色いタンクトップ。灰色の長ズボン。

パチの容姿説明 白髪パチ耳。前髪の真ん中のところだけ青髪。黒目で小柄。白いノースリーブのワンピース。でっかい尻尾が生える。メガネつ娘

A conclusion and a . . . (前書き)

サブ翻訳　『決着と...』

今回の構成・永華&剛毅 vs ピカパチ 視点変更、時間を戻して葉矢へ

A conclusion and a . . .

そこから私と鋼太の攻防は書き記す意味もないほどに極めて単調。 いうなれば互角だった。

変わったことといえばちやまが戦闘不能になつたことぐらい。 両者とも体力の限界が訪れはじめ、今は俗にいう膠着状態だ。

鋼太の手が私の喉を掴み、私のメタルクローラーは鋼太の首筋にピタリと当たられている。

「決着、ついてんのかな」

「え . . . ?」

「かつさばくのと電流流すのどじや、わけが違つぜ?」

「貴方だって、一度に一瞬で私を昏倒させられるくらいの電流を出す力は残ってないはずだよ」

「試してみるか」

「そうだね、私もこれを横に引くがあなたのその手を凍らせるか、直感で選ぶことにする」

「「せーのっ」」

二人がそれぞれの手に力を込めた瞬間、地面が揺れた。
驚いて互いの手を離したあとの反射の速さが明暗を分ける。

——氷華が、その場を制した。

地震の発信源は剛毅。

彼が渾身の一撃を地面に打ち、揺らしたのだ。
彼は味方である氷華を巻き込まないために、熱を彼女の足元に送り、
いち早く回避させた。

「うあああああああつ！」

飛びそこねた鋼太はこうかばつぐんのじしんをもろに受けてしまい、
その場に倒れ伏す。

「っくしょお……外野が手出しするなんて……反則だぜ？」

二人と別れてプロペラ群の元へ行くと、案の定俺達と同じ子が空を
仰いでいた。
灰色の髪に透明な「一」グル、図鑑をかざして確認してみるとやはり
ポワルンの異端者。
天候を操るとは知っていたけれど、こんな暴風まで起こせるだなん
て……

「ね、ねえ……そこの君」

「ん？ なあ」「——？」

無垢な表情でこちらに振り向く少年。

「こまちゅうとすじいんだ。少し、待つててくれるかな？」

えへへ。なんて付け足して再び一いちから視線をそらすといひを見ると、俺はやつと確信を持った。

物心付く前からそこにいた場合、何をやらされても本人にとつては善悪の概念などない。

“親”という名の絶対の意思に従つた行動は、彼らにとつては行なつて当然のこと。

——この子、自分が何をしているかなんてほとんど分かつちゃいないんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1941v/>

ポケットモンスター～とある人外達の奮闘記～

2011年12月31日21時51分発行